時代と共に変化する千波湖

地図を作る動機

千波湖畔にはダイダラボウのことが書いてある石碑があります。内容を要約するとダイダラボウという巨人が千波湖を作ったと説明がありました。ダイダラボウは想像の巨人としても千波湖は人造の湖なのかなと疑問を持ったことが地図作りのきっかけとなりました。実際に調べると千波湖は時代と共に変化してきた歴史ある存在ということが分かり、他の人にも千波湖がどのように変化してきたかを伝えたくて次のとおりにまとめてみました。

千波湖はもともと那珂川の氾濫などでできたもので上市台地と緑岡台地間の低湿地帯に生じた沼と考えられています。江戸時代初期には水戸藩の城下町建設により堀として利用され左図のような千波湖が形成されました。当時の千波湖は過去の文献によると大きさが現在の**3.8倍もあった**とされています。なお左半分を上沼、右半分を下沼と呼んでいたそうです。

明治2年に水戸鉄道が開通したことで**水戸の市街化を目的とした千波湖の埋め立てが計画**されました。しかし、埋め立ての協議は難航し実現には至りませんでした。しかし**大正初期には荒廃などの問題**が目立つようになり下沼部分の埋め立てを行い現在の大きさとなりました。左図は戦後すぐ撮影されたもので**食糧不足から水田として利用**していることが分かるものです。

現在は遊歩道に囲まれ散歩やランニングをする人で賑わっている千波湖ですが昭和43年に開園した偕楽園レイクランドの存在は自分達には知らないものでした。ジェットコースターや観覧車もあったそうですが昭和60年に閉園したそうで現在は千波公園となり各種イベントで使用される広場となっています。白鳥横断注意の標識もあり**千波湖の優しさ**を感じられます。

現在の千波湖でのイベント

春 水戸の梅まつり

偕楽園は1842年徳川斉昭公が開設したもので、園内には100品種3000本の梅が植えられ、2月～3月には全国から大勢の観光客が訪れています。また梅まつり期間中の日曜日は観梅デーとして梅香の下で水戸黄門一行などと写真サービスが行われています。

夏 水戸黄門まつり

水戸黄門まつりは、昭和36年に始まったまつりで、毎年8月の第1金・土・日の3日間開催されています。まつりの期間中には約4500発の花火が千波湖で打ち上げられます。また、山車巡行、水戸黄門パレードなどのイベントが開催されています。

秋 水戸の萩まつり

偕楽園は萩が有名で、徳川公も伊達藩から譲り受け偕楽園創設とともに園内に植えたもので宮城の萩を中心に750株が咲き競います。「中秋の名月」には偕楽園を夜9時まで特別開放し秋の風情を感じられる「月見の会」が開催されます。

冬 元旦マラソン

元旦マラソンは、毎年新春恒例のイベントで、千波湖を1周するマラソン大会です。コースの全長は約3Kmで市民ランナー約2300人が、毎年走り初めを楽しんでいます。

まとめ

この調査を通して、千波湖は**江戸時代には水戸城の堀**として利用され、**明治・大正には市街化を目的とした埋め立て**が行われ、**戦後は食糧不足を補うため水田として利用**されました。そして**現在は市民の憩いの場**として利用されています。このように時代と共に人の手によって変化してきた千波湖を今回の地図作りで学ぶことができました。最後に、これまで変化し続けてきた千波湖ですから、これからも**時代に合わせて変化を続けると思います。僕達は千波湖を見守り決して環境汚染などで悲しい変化をさせないよう努力して子孫に受け継がなければならないと思いました。**